中学校20年のあゆみ

岡方中学校

第二次世界大戦が終結をみて日本の国内は政治機構はもちろんのこと社会形態すらが百八十度の転換をしました。昭和二十二年、このとしに生まれたのが六・三・三制、いわゆる新しい教育理念が打ち出され、教育基本法が三月三十一日に公布され、新しい教育制度です。これにもとづいて学校教育法が制定、四月一日から施行されることとなりました。

「新制中学校」と呼ばれ「敗戦のおとしご」と呼ばれたこの制度も、はや二十年を経過しました。戦後混乱のもまたにあって新しい時代をになう少年の教育の場として大きな期待をかけられていたこの中学校二十年の足跡を振り返えってみたいと思います。今月から約一カ年間にわたって町内各中学校のあゆみを掲載いたします。

（編集室）

岡一小の間借りで発足

教師は校長の責任で招致

—その1—

昭和二十二年四月一日、学校教育法に基づく六・三制が実施され、当時長浦青年学校長だった神田忠三先生（現梅ノ町在住）が初代岡方中学校長として着任しました。長い耐乏生活が終わり続いて通貨価値が上昇するというインフレのさなかです。小さな村の財政では、とても校舎をつくり施設を整えるということはできません。幸い岡方第一、岡方第二の各小学校とも高等科があり、その生徒が自動的に新制中学に編入されたためそれをそのまま転用して発足することになりました。まず学校をはじめるには教師陣をとりあえずそろえなければなりません。県ではにわかに全市町村にできる中学校に配属する有資格者がないためとりあえず各校長の責任で必要な教師をあつめよという指令です。手づるを求めて教師をさがすほか、不足の分については各小学校の先生方からも併任していただくことでどうやら開校までこぎつけることができるようになりました。ところで、県では、中学校の設置は町村一カ校という方針を出し、岡方のように二校をそれぞれ独立して設置することはとても認めてもらえそうにありません。そうかといって規模の大きい岡一小の方を本校とし岡二校の方を分校とすれば、分校とされた地域の猛反対がおこり、学校運営にも支障をきたしかねない状態です。そこで県へは岡一校の方を本校とし、岡二校の方を分校とすることで了解を得、名称は、「第一校舎」「第二校舎」と呼ぶことになりました。校舎の維持管理は各小学校長にまかされていました。教師の数に限りがあるのに分校があり、さらに教科ごとの担任ということで教師の配属にもできるだけ優秀な人を分校の方へ配属するなど配慮がはらわれました。

五月十五日に開校

三年生は二部授業

五月十五日、開校式が行なわれました。生徒は第一校舎の方が百五十四人、第二校舎の方が百三十四人、合計二百八十八人です。高等科が引きつがれたため、三年生に当る生徒はほとんど高等二年で学校をやめてしまい。わずかに女生徒一人です。仕方なくこの生徒は二年生といっしょの二部授業をうけることになりました。

このころの状況を当時教鞭をとられた木村圭介先生（上市町在住）は、岡方中学校二十周年記念誌に次のように書いています。

「思い出のひとつは、新制中学校は発足したのですが、二年生は義務制でないため父兄は二年終了で学校をやめさせる考えの人が多いのです。父兄会を開いても集まりは悪く、毎日のように放課後家庭を訪問し父兄の説得活動をしました。なかには『かかさみたいなからだしているがね学校どころであらばね』と相手にしてくれません。生徒も『卒業したら、うんと働くから』もう一年がまんしてください。」と父兄に泣きつきます。しかし女生徒はほとんど二年終了で辞めてしまいました。

二十二年九月二十一日に西部郷（葛塚町、木崎村、岡方村、長浦村、南浜村、潟川村松ケ崎浜村）中学校陸上競技大会が、松浜中学校で挙行されました。低学年（一年）高学年（二・三年）別の競技でした。朝六時半太子堂から船で全校生徒が松浜に向かいましたが、総合点では三位になりました。帰路に船が浅瀬に乗り上げどうしても動かなくなり、男生徒や先生方は船頭といっしょに河に入り船を押してやっと帰ってきました。太子堂着八時、父兄が提灯（ちょうちん）をつけて阿賀の堤防に大勢出迎えてくれました。」

混乱した社会風潮のなかでどこの学校でもこの影響で生徒は粗暴でした。開校はしたものの教材や教具は極度に不足しており、まして新しい校舎の必要性をみんなが感じていない時代でした。生徒の間にいれずみ遊びなどが流行しだしたのもこのころです。教師は、はなはだしいのは一人で五教科も受けもたねばならないほど手不足でしたが、社会が不安定なために学習活動よりは生活指導に神経を集中し、放課後は毎日のように生徒の家庭訪問を行なって校外指導を優先的に取りあげなければならない状態でした。

（毎年開校記念日には校内マラソン大会を実施）

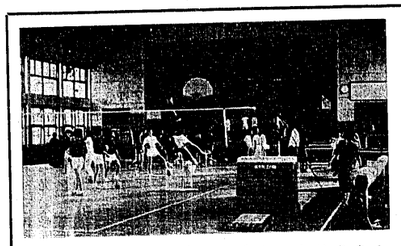
（昭和二十二年七月、職員から募集して制定された校章）

教科書も共同で学習

第一回卒業生は一人

教科書もひどいものでした。紙不足のため第一回目の教科書は新聞紙を四つ折りにしたような型で製本もされてなく、生徒が自分でハサミを入れて薄っぺらな本をつくりあげました。これも一人に一冊ずつあればよい方で教科によっては二人で共同で見なければならないものもありました。新聞紙なみの教科書とうすい配給のノートさらに場合によっては机も椅子もない教室の板場に坐って学習するということさえありました。しかし、翌年からは事情もややよくなって白い紙に色刷りされた教科書が配本されるようになりました。体育の時間には体育館がないため教室でマットを敷き、すもうをとったり、教室体操で時間を過ごさねばならないときもありました。

米俵の占領下にあったときですから、すべての面でこの指示に従がわねばなりません。特に衛生面について厳重で、たんつぼを設けること、消毒設備を完備することなどやかましくいわれました。



（写真は活発だ特に柔剣道に伝統を持つ体育活動）

設立当時の教育目標は、。進んで勉強し発表する生徒。丈夫な体ときまりのよい生徒。礼儀正しく行ないに責任をもつ生徒です。

二十二年四月戦後初の選挙で村長に当選した横山徳四郎（大瀬柳、故人）のきも入りもあり、学校でもこの年の秋に西部郷中学校の退勤会があるためその際校章の入った代表旗が必要だということで職員の間から校章を募集しました。当時岡一小の教頭で兼務教諭だった菅原克巳先生（長戸邑在住）の考案した図案を図案化したものが当選し村長から賞品がおくられました。

二十二年七月のことです。その後原図が匂ばっていたため美術主任の先生の意見を入れて丸味を出し、現在の校章が生まれました。

二十三年三月にはたった一人の第一回卒業生斎藤理子さん（現在東京都在住）がめでたく卒業しました。翌二十四年三月には男三十三人、女五人合計三十八人が卒業しました。各学校とも第一回、第二回の卒業生は高等科から引きつがれた生徒で義務制でないため途中で退学した人も多かったようです。

開校と同時に一年生として入学した生徒は義務制のため人数も多く、卒業生の数はぐっと多くなりました。せまい不自由な校舎のなかにあっても、社会情勢の落ちつきとともに、しだいに校風や伝統がきずかれようとしていました。

東京でいち早く

同窓会支部結成

こうしてまがりなりにも卒業生を送り出すことになりましたが、就職については新制度による新しい学校のため過去の実績があるわけでなく、先生方の苦労の日本の経済界が立ち直りをみせず暗中模索の時代でしたから新制中学卒業生の就職事情は悪く、現在求人が就職希望の何倍にもなっているのとくらべると大変な差でした。

神田校長は、こうした状勢のなかでいち早く知人をたより、手づるを求めて遠年かかさず上京し、就職先の開拓につとめました。教師の数も少なく、村財政も生徒の就職対策の費用を出せるだけの余裕がないという状況のため、自費を投げ出しては巷、夏休み期間を利用して校長みずから東ほん西走するという状態でした。そのかいあって他から刺激をうけることの極めて少ない純農村からの就職者の評判はよく、経済が復調するにしたがって求人も多くなってきました。年々東京へ就職する者が多くなるにしたがって、二十六年ごろ他校に先がけて岡中の東京都内における同窓会支部を結成しました。毎年会をもっておたがいの消息を交歓し合うなど郷土をはなれて一人働く青少年のよりどころとして意義深いものがありました。

困難だった進学区域の拡張

一方、進学については、新制度の発足と同時に、高等学校への進学区域が設けられました。当時の高等学校は、旧制中学校（五年制）がそのまま転用されたもので、公立のものとして水原農学校（現水原高校）、新潟市内には新潟中学校（現新潟高校）新潟工業学校（現新潟工業高校）、新潟高等女学校（現新潟中央高校）、新潟商業学校（現新潟商業高校）、新潟市立中学校（現新潟高校）があり、新発田市内には、新発田中学校（現新発田高校）、新発田商業学校（現新発田商工高校）、新発田農業学校（現新発田農業高校）、新発田高等女学校（現西新発田高校）がありました。定められた進学区域は水原高校です。当時進学率は極めて低かったとはいいながら、非農家の子弟や父兄は前身が農学校である水原高校へは入学を好まず、伝統のある新潟や新発田市内の高等学校へ進学制度の発足と同時に、高等学校への進学区域が設けられました。当時の高等学校は、旧制中学校（五年制）がそのまま転用されたもので、公立のものとして水原農学校（現水原高校）、新潟市内には新潟中学校（現新潟高校）新潟工業学校（現新潟工業高校）、新潟高等女学校（現新潟中央高校）、新潟商業学校（現新潟商業高校）、新潟市立中学校（現新潟高校）があり、新発田市内には、新発田中学校（現新発田高校）、新発田商業学校（現新発田商工高校）、新発田農業学校（現新発田農業高校）、新発田高等女学校（現西新発田高校）がありました。定められた進学区域は水原高校です。当時進学率は極めて低かったとはいいながら、非農家の子弟や父兄は前身が農学校である水原高校へは入学を好まず、伝統のある新潟や

二十五年六月十五日には、第三回卒業生の寄贈によって学校旗が樹立されました。

—以下次号—